

生きづらい世情、でも 手を合わせて祖先を偲ぶ

和顔愛語

寺報

令和3年9月号



全

全国的に長雨だった8月のお盆を終え、まもなくお彼岸を迎えます。今夏はオリンピック↓長雨↓パラリンピックと、多くの出来事がありました。そして全国的なコロナウイルスの感染拡大もあり、私達の生活もまだ非常事態から抜け出せないままです。天災は忘れたころにやってくる、といいますが、人間は古来からたびたび疫病に悩まされてきました。

鎌倉時代、ちょうど浄土宗を開いた法然上人が活動していた時期に、鴨長明が『方丈記』という随筆を書いています。長明は大火や地震あるいは疫病を、物事が絶えず変化する無常という観点でとらえ、それらはまた日本で起きた地震や飢饉、そして疫病の記録として読むこともできます。長明の淡々とした描写からは、当時の状況の悲惨さが滲み出ています。

『方丈記』によると養和年間(1181〜82)は飢饉と疫病で多くの人が亡くなりました。仁和寺の隆暁というお坊さんは、その死者を弔うため、遺体の額に梵

字を書いて供養したそうです。遺体を数えると、4、5月に命尽きたまま街中に置き去りになった方が4万を超えていたと記されています。長明は全国的にはもったくさんの人が亡くなっているだろうとつぶっています。

このような記録を読むと、鎌倉時代は今とは比べものにならないほど死が身近にあり、生きていくことが難しかったのだと感じます。コロナウイルスは、私達にそんな生きづらさを実感させるものとなりました。疫病に右往左往し、また死に恐れを抱くのは、いつの時代にも共通する人間のありかたなのでしよう。

秋のお彼岸は秋分の日を中日とした1週間です。秋分の日は「祖先をうやまい、亡くなった人々をしのぶ日」として定められた休日。皆様のご先祖様とともに、様々な状況で命を落とされた方々のために手を合わせ、お念仏をおとなえしましょう。阿弥陀様の御光が、その命を救い取り、そして皆様自身を照らしてくれることでしょう。

お経の意味を知ろう⑤ ～日常勤行式編～

かいきょう げ 【開経偈】

浄土宗では「日常勤行式」と呼ばれる式次第に則って読経します。式次第に書かれているお経(偈文)について毎号解説します。

無上甚深微妙法

百千万劫難遭遇

我今見聞得受持

願解如来真实義

【意識】

この上なく奥深い仏様の教えは、途方もないほどの時間を経てもなお出遇うことが難しいといわれます。それなのに私は今、幸いにもその教えを見聞きし、いただく機会を得ました。願わくは仏様の真の教えが理解できますように。

「お経ってどんなことが書かれているの？」誰しも一度はそんな疑問を持ったことがあるのではないのでしょうか。

お経はお釈迦様の教えを文章にまとめたものです。ここでは日頃のおつとめ(勤行)で読経する式次第をまとめた「日常勤行式」を丁寧に解説していきます。

【解説】

開経偈は、尊い教えが記されたお経の本を開き、誦経というお釈迦様の教えを拝読する前に読むお経です。

意識に「途方もないほどの

時間を経てもなお出遇うことが難しい」とありますが、法

然上人はこの難しさを「天か

ら糸を垂らし、たまたま海底

に落ちていた針の穴にその糸

が通る程のこと」と譬えてい

ます。

そもそも仏教で生き物は地

獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天という六つの世界(六

道)を常に流転していると説きます。行いによつては地獄、餓鬼、畜生の「三悪道」に落ちてしまうこともありま

す。浄土宗ではこのサイクルから離れ、苦しみのない阿彌陀様の極楽浄土へ往生することが目標となり、そのための

パスポートといえる教えが「お念仏」なのです。

お釈迦様が仏教を説かれて約2500年、法然上人が浄土宗を開かれてもうすぐ

850年を迎えようとしています。教えは変わることなく私達を導き続けてくれます。

人として生を受けたこと、これ自体が奇跡ともいえること

ですが、そこにはご先祖様がつないでくれた命のバトンと

いうご縁も欠かせません。そのことをよくかみしめれば、

仏教に出会えた感謝とともに、一言漏らさず理解ができ

ますように、という思いが自然に起こってくるのではない

浄土宗の 基礎知識

供花

仏様へのお供えの定番はお花です。お仏壇には「三具足」といわれる香炉・燭台・お花の三つを供えることが基本とされます。お花とロウソクをそれぞれ一對にすると「五具足」といい、正式な飾りつけとなります。

さて、お花は様々な形で仏様にお供えされます。お仏壇では花瓶に入れて供え、法要では華に模した紙「散華」を撒いて仏様を供養します。生け花も、仏前に供えるお花をより美しくするための工夫から生まれたものといわれます。美しいお花を仏様に供えたいという思いはいつの時代にも通じるものなのです。



伝えたい言葉 (5)

阿彌陀仏と

十声とこえとなえてまどろまん

永ながき眠ねむりに

なりもこそすれ

(法然上人ご詠歌)

〈現代語訳〉

南無阿彌陀仏と十遍じっぺんの念仏を

となえて、眠りにつきましよう。

永遠の眠りになるかもしれませ
んから。

寝苦しい真夏の夜は、夜中に目を覚ましてしまう方も多いでしょう。快適な睡眠は、日々の暮らしの質をあげてくれるものです。子供の頃には「明日もあるんだから、もう寝なさい」と言われて育って参りましたが、大人になって思い返すと、翌日

に備えて、しっかりと休みをとることは、理にかなった考え方だと思えます。

浄土宗を開いた法然上人は、毎日、6万回の念仏をおとなえしていたといえます。一時間は3600秒、早口でとなえても、起きている間は「南無阿彌陀仏」ととなえる生活を続けていたのだと思えます。

お念仏と共に生活をした法然

南無阿彌陀仏…



上人は、眠りにつく前もそれを忘れませんでした。日課として十遍じっぺんのお念仏をおとなえしてから、横になったのです。冒頭のお歌はそれを示しています。法然上人は「この眠りについたらまま朝を迎えることがないかもしれない」と考えていたようです。

鎌倉時代は今と違い、医療も未発達で、眠りについたらまま起きることなく、亡くなっていく人もいたことでしょう。自分の命がいつ尽きるかわからないなかで、「いつぞその時」が来てもいいように、南無阿彌陀仏をとえ続ける。その行いによって、臨終りんじゆうの際に、阿彌陀様のお迎えをいただくことができます。法然上人は確信していました。そして、いつ死んでも阿彌陀様のお迎えをいただける、というその確信は法然上人の日々の暮らしを穏やかなものにししました。お念仏の功德は、た

だ最期の時にだけあるのではなく、恐れることなく死と向き会えるようになることで、日々の暮らしが穏やかになっていくのです。

私は法然上人のこのお歌を聞くと、あるお檀家さんのことを思い出します。その方はまさにこの歌の通りに、亡くなったそうです。夜眠りについて、朝、そのまま目覚めることなく、極楽浄土へと旅立たれたのです。ご家族からは「ぐっすり眠っているな」としか思わなかったと、うかがいました。お念仏の教えを全うしていたお檀家さんでしたので、苦しみを感じることはないよう、阿彌陀様がお迎えに来てくださったのだと思います。

いつ尽きるかわからない命。寝る前の「十声とこえの念仏」で、阿彌陀様にお見守りいただきながら穏やかな眠りにつきたいものです。

Q&Aですぐわかる! なるほど浄土宗

⑤

身近な仏教の疑問を Q & A
形式で説明します!

——お寺からいただいた「年回表」を見ると一周忌と五十回忌以外は3と7のつく年に法事をやることになっていくようですが、その由来を知りたいです。

くなつたその日を1回目の命日と考え、3回忌は亡くなってから2年後、7回忌は6年後に勤めることとなります(1周忌は2回忌ということになります)。

さて、3と7の関連する年に法事を営むのは、中国の文化に見られるもので、お経にも説かれる「三魂七魄」の教えに由来しているという説があります。魂には3と7にちなむ状態があり、それにあたる年に法事を行うようになったというものです。

——人が亡くなるとご法事をお勤めします。初七日や四十九日、月命日のお参りや、年に一度の命日にお勤めをする祥月命日なども法事の一つです。その中でも一周忌以降、3と7のつく年に行う法事を年回法要といえます。一周忌は亡くなった日から一年後に行う法要ですが、それ以降の3回忌や7回忌は、亡

このような法事の起源は古く、平安時代の初期には今と同じように初七日から3回忌までの法要が行われていたようです。その後、十三仏信仰という十三体の仏様に対する信仰が広まり、初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日、百廿日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌の十三の年回法要に守護仏となる仏を配当し、年回法要を行うことが定着しました。死者と向き合ってきた証が現在の年回法要の形となっているのです。

住職あいさつ

もうすぐお彼岸の時期が参りますが、お彼岸の一週間はお墓参りをするだけでなく、ご自身の「心の修行」をする期間でもあります。

仏教には「禅定」という言葉がありますが、不安を感じた時は、一旦休憩し、「今」という時間に集中する行動のことをいいます。今は沢山の情報が世の中に溢れており、なかなか落ち着く時間も無く、漠然とした不安に襲われてしまうことがあると思います。そんな時は、何も考えずに深呼吸してみてください。不安な気持ちは極楽にいらつしやる仏様やご先祖様が、そっと拭ってください、穏やかな気持ちで過ごすことが出来るでしょう。

コロナ禍でも、何かできることはないかと始めた寺報も今号で1年が経ちました。これから皆様も少しくもホッとできるような時間を提供できそうです、発行して参りたいと思います。

普照山 正定寺

■所在地
〒111-0036 東京都台東区松が谷2丁目1-2
■TEL: 03-3841-1853 ■FAX: 03-3841-1777

紫金山 静蓮寺

■所在地
〒110-0004 東京都台東区下谷1丁目12-21
■TEL: 03-3843-4034 ■FAX: 03-3843-3442

母冲山 清見寺

■所在地
〒100-2211 東京都小笠原村母島字元地122

代理墓参 承ります

コロナ禍でなかなかお墓参りにも行けない…そんなお声が多数寄せられましたので、住職が代理でお墓を掃除し、お参りをいたします。ご希望の方は、直接ご連絡いただくか、冥加料を現金書留にてご郵送ください。後日お参りの様子をお手紙にてお送りさせていただきます。

